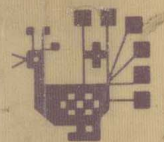


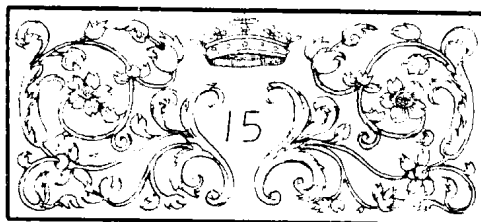
世界の
名作図書館



トムソーヤの冒険
王子と巨き

マーク・トウ

世界の名作図書館

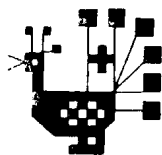


トム・ソーヤーの冒険

マーク・トウェーン・作 亀山龍樹・訳

王子とこじき

マーク・トウェーン・作 白木 茂・訳



KÔDANSYA



N.D.C.933

世界の名作図書館 15

トム・ソーヤーの冒険
王子とこじき

亀山龍樹・白木 茂訳

講談社 昭和42年

292p 23cm

昭和42年 1月15日第1刷発行

定価 550 円

訳 者

亀山龍樹・白木 茂

発行者

野間省一

発行所

株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(942)1111(大代表) 振替 東京3930

印刷所

図書印刷株式会社

PRINTED IN JAPAN

©亀山龍樹・白木 茂 1967

製本 図書印刷株式会社

乱丁本・落丁本はおとりかえいたします。

も く じ

世界の名作図書館

15

愛と友情の名作



トムソーヤの冒険……

マーク・トウェーン・作
 亀山龍樹・訳……7

第一部

トムとおばさん……………9

なぐりあい……………12

ゆかいなへいぬり……………16

たたかいと、さんしきすみれ……………21

日曜学校……………26

かぶとむしさわぎ……………31

にせ病気……………34

宿なしのハック……………36

遅刻とベッキ……………41

婚約とけんか……………44

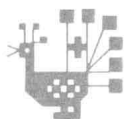
山賊ごっこ……………48

第二部

真夜中の墓地……………51

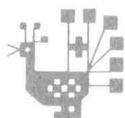
ちかい……………57

ポッターつかまる……………60



SEKAI NO MEISAKU TOSYOKAN

ねことくすり……………	63
トム、海賊になる……………	67
無人島で……………	72
トム、家にかえる……………	75
ひみつの計画……………	78
生きていた海賊たち……………	83
ふしぎなゆめ……………	86
しかえし……………	88
すずかけの木の皮……………	91
身がわり……………	93
先生のはげ頭……………	97
殺人事件の裁判……………	99
第三部……………	
たからさがしをしよう……………	105
ゆうれい屋敷で……………	108
夜中のできごと……………	114
いなくなったふたり……………	118
ハックの追跡……………	120



たから箱はどこへいったか……………122

救助隊……………126

ほらあなの中で……………128

ふたりがかえってきた……………134

たからを発見する……………136

金貨の山……………141

山賊をはじめよう……………143

王子とこじき……………

マーク・リトウエン・作
白木茂・訳……………147

1 王子とこじきの誕生……………149

2 子どものころのトム……………149

3 王子にあったトム……………154

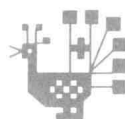
4 こじきになった王子……………160

5 宮殿のトム……………163

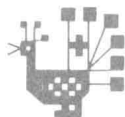
6 身がわり王子……………169

7 食卓でのしっばい……………173

8 大印章のゆくえ……………176



26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
ヘンドンの故郷へ……………	ヘンドンの知恵……………	ヒューゴのわるだくみ……………	かけつけたヘンドン……………	気ちがいぼうず……………	小さい王さまと少女……………	さまよう王子……………	ならずものの酒もり……………	森の中の一軒家……………	国王になったトム……………	たたかれ役の少年……………	きえた王子……………	ヘンドンの身のうえ話……………	王子と浪人……………	大宴会……………	わるものの手をのがれて……………	王子のくるしみ……………	テムズ川のお祝い……………
258	254	250	246	242	237	231	225	220	212	206	202	198	191	188	186	180	178



トム・ソーヤーの冒険^{ぼうけん}

マーク・トウェーン・作^{さく}

亀山龍樹・訳^{やく} 中山正美・絵^え



「トム＝ソーヤーの冒険」

について *
亀 山 龍 樹

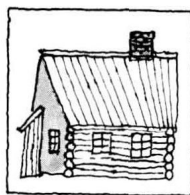
アメリカのまんなかをゆうゆうと流れている、世界でも指おりの大きな川ミシシッピのほとりにある小さな町に、トムという、たいへんないたずらっ子がいました。わんぱくで、こっけいで、知恵もなかなかのものです。学校をずる休みしたり、真夜中の墓場へいたり、友だちと海賊ごっこをして、無人島にたてこもったり……。

けれども、トムは、いかにも少年らしく、正義を愛して、勇気もあります。いつもいきいきと自由にふるまいます。トムは、わたしたちのしたいことを、かわりに、堂々とやってくれるのです。

だから、世界じゅうの子どもたちは、このトムが大好きですし、おとなもトムを愛して、じぶんたちの子どものころをなつかしく思い出すのです。トムはこうして、すべての人の心のなかに、いつまでも、はつらつと、はねまわっていくことでしょう。

第一 部

トムとおばさん



「トム。」

へんじがない。

「トム。」

へんじがない。

「あの子^こったら、どうしたんだろうねえ。これ、トムや。」
ポリーおばさんは、めがねをすりさげて、ふちの上^{うへ}から、へやの中^{なか}を見^みまわした。おつぎは、めがねをおし上^あげて、下^{した}からながめた。おばさんが、子^こどもみたいになつまらないものをさがすのに、めがねを使^{つか}うなんて、めったにないことだ。めがねは、おばさんのよそいき用の、じまんのもので、だてめがねなのだから。見^みるだけなら、ストーブの鉄^{てつ}のふたをはめたって、おばさんにはおなじだ。

おばさんは、ちよつと、とまどったようすで、それから、そうもこわくない声^{こゑ}で、そこらの家具^{かぐ}によくきこえるように、

「ようし、つかまえたらしいご……。」

いいかけて、ほうきでベッドの下^{した}をつつきにかかったの
で、あとはいえなかった。

でてきたのは、ねこが一ひき。

「あんな子^こって、ありやしない。」

おばさんは、あけっぱなしの戸口^{とぐち}にいつて、庭^{にわ}を見^みわたした。トマトと、ちょうせんあさがおはあるけれど、トムはいない。とおくにむかつて、

「トムやああ。」

うしろでかすかな音^{おと}がした。おばさん、すかさずふりかえつて、トムのチョッキのだぶだぶのところを、やつとばかりにつかんだ。

「そうれ、やつぱりあの戸^とだなんだったんだね。あそこでなにをしてみました。」

「なんにも。」

「なんにもだつて。その手^てをごらん。口のまわりもだよ。なんだね、それは。」

「知らないよ、おばさん。」

「そうかい、わたしや知^しってるよ。ジャムだよ、ジャムつてものだよ。あのジャムに手^てをつけたらひどいよって、四十べんもいっといたはずだよ。さあ、むちをおよこし。」

そのむちが、空中^{くうちゅう}にうなつて、さすがのトムも、もうだめ、というそのとき、

「あつ、おばさん、うしろを見て。」

おばさんは、あわててふりむいた。そのすきに、トムはにげだし、高い板^{いた}べいをのりこえて、たちまちすがたをけしてしまった。

おばさんは、あつけにとられて、つつ立^たっていたが、やがてくすくすわらいだした。

「なんてあきれた子^こだろ。またいっぱいくわされちまつた。氣^きをつけてるのに。年^{とし}よりってだめだね。『おいぼれいぬには芸^げがしこめぬ。』っていうけど。でもあの子^こったら、ふつかとおなじ手^ては使^{つか}わないんだから。こんどはどんなことをやるか、けんとうもつきやしない。

それに、トムは、わたしがぶたないことも知^しってる。たしかにわたしや、あの子^このためになるしつけをしてないよ。聖書^{せいしょ}にも、『子^こがかわいけりや、むちでぶて。』っていつてあるんだもの。

でも、死^しんだ妹^{いもうと}の子^こだからね。なんでぶてるのか。

ほんに、聖書^{せいしょ}にいつてあるとおりだよ。『人^{ひと}は、いのちみじかく、なやみ多^{おほ}し。』ってね。まったくそのとおり。

あの子^こは、昼^{ひる}から学校^{がっこう}をずるける氣^きらしいね。あしたはこらしめに、うんと働^{はたら}かせなくちゃ。土曜^{どようび}日で学校^{がっこう}が休^{やす}みだし、ほかの子^こはみんなあそぶだらうけど。なにせ、トムは仕事^{しごと}が大^{だい}きらいだし、働^{はたら}かせるにもほねがおれる。だけど、きびしくするのが、わたしのつとめなんだ。でないと、わたしがあの子^こをできそこないにしてしまうからね。」

思^{おも}ったとおり、トムは昼^{ひる}から学校^{がっこう}をずる休^{やす}みして、たいへんゆかいにあそんだ。夕^{ゆう}がた、かえってきたら、黒人^{こくじん}の少年^{しょうねん}のジムが、あすのまきを、切^きったりわったりしていた。四分^{ぶん}の三^{さん}ぐらいはすんでいたの、手^てつだいなんてものじゃない、まあ、トムがじぶんの冒険^{ぼうけん}話^わをしてきかせるのに、やつとまにあつた、といったほうがいい。

トムの弟^{おとうと}のシッドは、おとなしくて、冒険^{ぼうけん}やいたずらはしない。ちゃんと、じぶんのうけもちの、こっぱひろいをすませていた。

夕^{ゆう}ごはんのとき、トムがおばさんのすきをねらって、さとうをちよるまかしていたら、おばさんは、その日^ひのことをいろいろとききはじめた。おばさんは、たくらんだ質問^{しつもん}で、トムをひっかけて、とっちめてやるつもりだ。おばさ



んは、じぶんで、そんなかけひきがうまい、とうぬぼれている。見えすいたわなでも、じぶんはぬけめなくやっているつもりで、とくいである。

「トム、きょうは学校は暑かったろうね。」

「うん。」

「ひどく暑かったろうね。」

「うん。」

「およぎにいきたくなかったかい、トム。」

トムは、ひやつとした。

(ばれたかな。)

ゆだんはならない。おばさんの顔をさぐるように見た。なんともわからない。そこで、

「ううん——あんまり。」

すると、おばさんは、手をのばして、トムのシャツにさわってみた。

「でも、いまはそう暑そうでもないね。」

おばさんは、はかりごとをさとられずに、シャツがぬれていないことをたしかめたので、とくいだった。ところが、トムも、なりゆきにちゃんとかんづいた。そこで、さきまわりをしていった。

「ほくたち、頭に、ポンプの水のぶっかけっこをしたん

だ。だから、ぼくの頭^{あたま}、まだぬれてるよ、ほら。」

ポリーおぼさんは、そんないいしようにを見^みのがしていたものだから、くやしかった。が、すぐに、うまい考^{かん}えを思^{おも}いついた。

「トム、頭^{あたま}に水^{みづ}をかけたからって、わたしがぬってあげていたシャツのカラーは、とらないでもよかったろう。上着^{うわぎ}のボタンをはずしてお見^みせ。」

トムは、もう安心^{あんしん}という顔^{かお}で、上着^{うわぎ}のえりをひろげて見^みせた。シャツのカラーは、ちゃんとついていた。

「へえ。もういいよ。わたしは、てつきり、おまえが学^{がく}校^{こう}をずるけて、およぎにいったとにらんだんだだけねえ。だけど、かんべんしてあげるよ。おまえは、ことわざにある、毛^けを焼^やかれたねこみたいだね。見^みかけによらないってことだよ。こんどだけはね。」

おぼさんが、ざんねんでもあり、うれしくもあるような気持^{きもち}ちになつているとき、シッドが口^{くち}をだした。

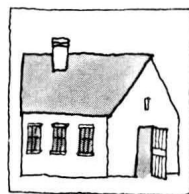
「だけど、おぼさん、白糸^{しろいと}だったのが、黒糸^{くろいと}になつてるよ。」

「そうだった。わたしや白糸^{しろいと}でぬったんだよ。トム。」

けれど、トムは、そのつづきをまっではいかなかった。へやをとびだしながら、ドアのところどなった。

「シッド、おぼえてろ。」

なぐりあい



トムは外^{そと}へでてから、上着^{うわぎ}のえりのおりかえしにさしてある、二本^{ほん}の大きな針^{はり}をしらべた。一本^{ほん}には白糸^{しろいと}、もう一本^{ほん}には黒糸^{くろいと}がまいてある。

「シッドがだまつてりや、おぼさんにわかりっこなかったんだ。おぼさんも、白^{しろ}か黒^{くろ}か、どっちでぬうかを、きめてくれりやいいんだ。おぼえきれないや。だけど、シッドはひっぱたいてやる。」

しかし、二分^{ふん}もたたないうちに、いまのくよくよごとなんかすっかりわすれた。新^{あた}しい、おもしろいことに、むちゅうになつたからだ。新^{あた}しいことというの、ある黒人^{こくじん}からならいたての、めずらしい口^{くち}ぶえのふきかただった。音がふるえて、小鳥^{ことり}がさえずるようにきこえる。トムは、ねっしんに練習^{れんしゅう}したおかげで、すぐに、こつをのみこんでいた。そのふきかたで口^{くち}ぶえをならしながら、トムは通^とりをあるいていった。まるで、新^{あた}しい星^{ほし}を発見^{はっけん}した天文学^{てんもんがく}者のような気持^{きもち}ちだった。

夏^{なつ}のたそがれは長^{なが}い。暗^{くら}くなるのには、まだ間^まがあつた。

トムは口ぶえをやめた。目の前に、見たことのない、トムよりいくらか大きな少年が、あらわれたのだ。セントピーターズバーグのような、ちっぽけな町では、よそのものはすぐにわかる。そいつは、日曜日でもないのに、いい服を着て、めかしこんでいた。こいつはびっくりものだ。しゃれたぼうしをかぶり、新しい、青い上着になったボタンをちゃんとはめ、ズボンもしゃっきりしている。なんでもない金曜日なのに、くつまではいていた。おまけに、はでなりボンのネクタイ。いかにも都会のやつくさい。トムは、しゃくにさわたった。

(へん、おしやれめ。)

と、ばかにするそぶりを見せてはいるものの、このあきれかえったやつを見れば見るほど、じぶんのみなが、いよいよみすばらしい気になってきた。

ふたりとも、だまりこんでいた。いっぽうが動くと、もういっぽうも動く。横へ横へと、円をえがいてまわった。たがいに、顔と顔、目と目をはなさなかった。

ついに、トムが口をきった。

「おまえなんか、ぶんなぐってやらあ。」

「やれるものなら、やってみろよ。」

「できるとも。」

「できるもんか。」

「できる。」

「できない。」

「きる。」

「きない。」

ぶきみなにらみあい。トムがいった。

「おまえ、なんて名だ。」

「おまえの知ったことかい。」

「ようし、知らすようにしてやるぞ。」

「ふん、してみたらいいや。」

「つべこべいうと、ほんとにやるぞ。」

「つべこべ、つべこべ、つべこべ。さあ、どうだ。」

「ふうん、それで気のきいたへんじをしたつもりだろ。おまえなんか、かた手でやつつけられるんだぞ。」

「そんなら、やつたらいいじゃないか。」

「人をばかにすると、ほんとにやるぞ。」

「へん、おまえみたいに、手だしもできないで、まごまごしてるやつが、ほかにたくさんいたっけな。」

「なんだい、気どりがあって。そのぼうしの、みてくれがいいや。」

「きらいだったら、たたきおとして、ふみつぶしたっていい。」

いんだぜ。そのかわり、ひどいめにあわせてやる。」

「うそつきやろう。」

「おまえがうそつきだ。」

「おまえは、口つきやろうのうそつきで、けんかなんかできるもんかい。」

「なんだ、おまえこそだ。」

「おい、いつまでもなまいきをいつてると、頭にでっかいやつをくらわしてやるぞ。」

「うん、くらわしてみろ。」

「やるとも。」

「じゃ、なぜやらないんだ。やる、やる、と口ばかりじゃないか。こわいからだろう。」

「こわいもんか。」

「こわいのさ。」

「こわかない。」

「こわいのさ。」

ふたりは、まだだまりこんでにらみあい、ぐるぐるまわりをはじめた。やがて、肩と肩が、ふれあいそうになった。トムがいった。

「どけ。」

「おまえこそ、どけ。」

「どくもんか。」

「こっちだって、どくもんか。」

ふたりは、つつ立ったまま、足をふんばって、おしつくらをやり、にらみあった。どちらも負けなかった。まっかな顔になるまでやったあげく、ふたりはゆだんなく身をひいた。トムがいった。

「よむむしのちんころいぬめ。おれのでかい兄きにいいつけてやるぞ。兄きは、おまえなんか、小指の先ではじきとばしちまわあ。」

「おまえの兄きなんか、へいちやらだい。ぼくのにいさんのほうがでっかいぞ。おまえの兄きなんか、かきねのむこうにほうりなげつちまうから。」

どちらも、兄きなんか、いはしない。

「うそだい。」

「うそなもんか。」

トムは足の親指で、地面に線をひいた。

「この線からこっちにきてみる。立てなくなるまで、ぶんなくってやらあ。」

あいての少年は、すぐにまたいで、

「さあ、やってみる。やるとうったろう。」

「せかせるない。用心しながらまってる。」